慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	F・エヴラル 大規模な《ファルム》について
Sub Title	
Author	渡辺, 國廣
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1961
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.54, No.7 (1961. 7) ,p.607(91)-
JaLC DOI	10.14991/001.19610701-0091
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19610701-0091

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

と国際収支の問題がより明確にとらえられ、実証化のこころみもなされている。しかし理論的発展はなお統一的な把握を行なわしめるには不十分であることは云う迄もない。

したがって経済成長という点に本書が中心をおくためには、さらに一層の検討が必要であり、また本書全体に関して、もう少し整理し、系統立てることによって、もっとすっきりしたものになると思われる。

だが、このような問題点があるにしても、経済成長の観点から国際収支問題の把握につとめた点では画期的であり、とくに第一編の国際収支表のすぐれた分析と第二編における資本蓄積の所得・価格メカニズムの指摘および第三編の国際収支の不均衡の分類、わが国の国際収支の動向分析には、新しく示唆される点が多々ある。また国際金融面からの分析が不足しているように思われるが、土屋氏は、これに関する新しい著作を計画されているとのことで、大いに期待がよせられる。（著者は中央大学経済学部助教授・中央経済社・昭和三十六年四月十五日刊・A5・三七六頁・七八〇円）

新刊紹介

F・エヴラル『大規模な《ファルム》について』

十七世紀にはいれば領主はこれまでと違いもはや在地しない。彼は村の生活を捨て、文人ないし武人として宮廷に出仕するようになった。その過程で領主は土地を買戻し、『ファルム』とした。そしてこの『ファルム』を彼の生活の今後を支える重要な基礎たらしめようとしたのであった。領主はそれを直轄財産とみなし、経営を『ラブルール』に委嘱した。『ラブルール』はそのことにより『フェルミエ』と呼ばれた。『ファルム』は十八世紀にはいってその規模を拡大していった。この論文ではそうした『ファルム』の具体像がパリ周辺について示される。

一つの『ファルム』は一七〇五年にその規模一六六アルパンであった。しかし一七六九年には四七五アルパンにまで拡大している。また他の『ファルム』は一七二七年に一五一アルパンの規模があった。しかし一七七八年には二〇七アルパンの規模にまで拡大していた。従って収奪はかなり厳しかったといえよう。そして十八世紀末にはこれら『ファルム』の平均規模は一八〇ヘクタールから二五〇ヘクタールに達した。しかし『ファルム』を構成する地片がすべて一ヵ所にまとまっていたわけではない。統合しようとする努力は認められる。しかしこの段階で完全な成功を収めることは困難であった。地片は散在のままの状態でいることが多かったのである。甚だしい場合には三ないし四の教区に分散していた。これはもっぱら当時の農業経営の仕組に帰せらるべきことであった。

当時パリ周辺では三圃制が支配的である。輪作のなかに休耕が折込まれていたのであった。休作地を廃止した事実は例外としてしかみられなかった。農業経営は伝統的な枠のなかに閉込められていた。『フェルミエ』は契約のなかで耕作に際し休閑を折込むよう指示された。新農法への移行は依然として危険視されていたわけである。「穀物は多い。しかし牧草はかなり乏しい。」農学者のそうした批判が的中するような農業の状態がほとんど十九世紀まで続いたとみなければならない。しかし多くの曲折を経て一八四〇年以降になれば休作地で甜菜が栽培されている。そしてこのことが旧い状態を崩壊に導く直接の契機となったことは、著者の指摘によるまでもなく、もはや自明のところであろう。新農法は大規模な展開を示す。端的にいってパリ周辺では工業作物の栽培が殷賑を極めた。著者は引続いてその経営を追う。Fernand Evrard, "Les grandes fermes entre Paris et La Beauce," Annales de Géographie, t. XXXV pp. 210-226. ¥. 460.

—渡辺國廣—

＊　＊　＊

石沢元晴著『現代米ソ経済論』

これはまことに便利な書物である。本書は七章から成る。まず第一章において、米ソの経済競争が戦後における米ソ冷戦のターミナルとしての重要な現代史的意義をもち、今後の世界経済の展開の起点となることを明らか